

References

- Maekawa, F. 1955. Species problem and phylogenetic appreciation for diagnostic characters—A case of *Epimedium*. Journ. Jap. Bot. 30: 353-358. Suzuki, K. 1978. Biosystematic studies of Japanese *Epimedium* (Berberidaceae) (1) Variation of the populations in Shikoku. Journ. Jap. Bot. 53: 203-212, 225-231. —1981. Biosystematic studies of Japanese *Epimedium* (Berberidaceae) (2) Variation of the populations in Kyushu. Journ. Jap. Bot. 56: 9-16, 33-40.

* * * *

先に鈴木 (1978, 1981) が報告した四国・九州におけるイカリソウ属集団の変異解析の結果から、ヒメイカリソウ (*E. trifoliatobinatum*) に1新亜種 (シオミイカリソウ, 新称), *E. trifoliatobinatum* subsp. *maritimum* K. Suzuki) を認め、またサイコイカリソウ (*E. kitamuranum*) をバイカイカリソウ (*E. diphylum*) の亜種とするのがよいという結論に達した。新亜種を記載し、2亜種の分類学的な扱いの論拠を記した。

□ Dassanayake, M. D. & F. R. Fosberg (ed.): **A Revised Handbook to the Flora of Ceylon. Vol. II.** 24×15 cm. 511 pp. 1981. Ameind Publ. Co., New Delhi. ¥7,500. 1980年に出版された第1巻につづく第2巻である。これには10科の植物が載せられている。順に上げると、ヤクシマラン科、ラン科、ノウゼンカズラ科、ウキクサ科、フトモモ科、トベラ科、サクラソウ科、ヤマモガシ科、ヒルギ科、ジンチョウゲ科である。10科といってもラン科以外は種類数が少なく、殆んど図がないので専門家以外はあまり興味を引きそうにないが、ラン科は380頁を占め、1種類ごとにきれいな全形図とくわしい解剖図がつけられていて、東アジアのラン科を調べるのには貴重な資料を呈供している。コ克蘭やカ克蘭、キンギンソウ、ネジバナなど広分布種を除いて日本との共通種は殆んどないが、日本との共通属が多数あるのは意外である。クモラン属、オニノヤガラ属、オサラン属、イモネヤガラ属、ヨウラクラン属、クモキリソウ属、シュスラン属などセイロンから64属知られているうち29属は共通である。ランの好きな人には非常に参考になる本である。ラン科は野生種のみを扱っているが、他の科では栽培種も同格に載せている。したがってセイロンに野生しないユーカリ属も多数の種類が記述されている。産業上からはこれも大切なことであるが、種名の活字体を変えるとかして扱ってくれ地使用上便利であろう。(山崎 敬)